JHPF NEWS
Japan Hospice Palliative Care Foundation
VOL.21 2011／11
財団ニュース

（公財）日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団
〒530-0013 大阪市北区茶屋町2-30
TEL.06-6375-7255 FAX.06-6375-7245
E-mail : hospat@gol.com URL : http://www.hospat.org/

マイケル・カーニー博士ご夫妻 初来日

Whole Person Care ワークショップ

新しいプログラム開発をめざして

キーワードは《SELF AWARENESS（自己認識）》
職種の垣根を越え、全員が自己を見直すことからスタートした今回のワークショップ。
参加者の大きな反響を得、新しい教育プログラム開発の大きな礎石となりました。

ワークショップを終えて

事業委員長 恒藤 暁

当財団主催のWhole Person Careワークショップが、本年10月1～2日に千里ライフサイエンスセンターで開催されました。このワークショップは、従来のような知識提供型ではなく、体験学習を主としており、ホスピス・緩和ケアに従事する医療従事者の育成を目的としたものです。北は北海道から南は宮崎県までの32名の医師、看護師、薬剤師やソーシャルワーカーが参加しました。

講師は、米国の Santa Barbara Cottage Hospital の Medical Director のMichael Kearney 先生と臨床心理士のRadhule Weininger先生です。Kearney先生は、医学生だった1977年に終末期患者の病院の対応に疑問を持ち、友人から「癒しの場所」（a place of healing）がホスピスであると言われ、セント・クリストファー・ホスピスを見学しました。そしてホスピスが自分のライフ・ワークであると確信し、卒業後、セント・クリストファー・ホスピスで7年間、Cicely Saunders先生と一緒にホスピスに従事されています。いわゆるSaunders先生の愛弟子の一人であります。

お二人の講義、瞑想やグループワークを通して、「全人的ケアの理念」、「自己認識」、「自己共感」、「意識的認識」、「瞑想的認識」などを学びました。今後、当財団で同様なワークショップによるホスピス・緩和ケア従事者の育成プログラムの開発につなげていく予定です。

WPC ワークショップに参加して

京都大学医学部附属病院 岸本寛史

以前から親しくしていたユング派分析家のRobert Bosnak先生に誘われて、2010年1月29日から31日にかけて米国サンタバーバラにて行われたImagination and Medicine Conference IIに参加した際、Michael Kearney先生の講演を聴いて、深く感銘を受けました。いつか日本にお招きしたいと漠然と思っておりましたところ、図らずも、本ワークショップのために来日されるのでと恒藤先生から参加のお誘いを頂き、非常に楽しみに参加させていただきました。この機会を頂いた恒藤先生に心から感謝申し上げます。

冒頭から「緩和医学は単にもう一つの（生物医学の枠組みに限定された狭い意味での）専門分野か」という問いに対して、トータル・ペインに取り組もうと思うなら、その答えはNoであると明確に話されたのが印象的でした。続いて、ソウル・ペインという考え方を紹介されましたが、スピリチュアル・ペインがどちらかというと上へ、という志向性を持つのに対し、ソウル・ペインは、下へという方向性を持つ点が対照的だと思いました。深いところで進行しているプロセスから離れて、意識の中心であるエゴ（自我）がこの世のどこか（Kearney先生は岩場の比喩を用いておられましたが）にしがみつこうとしている時に生じる痛みで、こういう状況では岩場にしがみつくのではなく、下に飛び込むような姿勢が必要になるのだとのことでしたが、ここで印象に残っているのは患者さんにそれを求めるのではなく（あるいはその前に）、むしろ治療者自身のこととしてその問題を語られていたことでした。このあとで続く4つのセッション（Mindful awareness, Self-Knowledge, Self-Empathy, Contemplative Awareness）はそのダイブを可能にする取り組みと位置づけられますが、これを具体的にどのように進めていくかについては、まだまだ長い道のりではないかと感じました。生得的にプログラムされた自動的な反応とマインドフルな反応の分かれ道は、スロー・ダウンであると述べられていたように、今回のワークショップの内容を地に足のついたものにするためには、スロー・ダウンしてじっくりと煮詰めていく必要があるのではないかと感じた次第です。

第9回アジア環太平洋ホスピス大会に参加して

財団理事長　柏木 哲夫

第9回アジア環太平洋ホスピス大会（9th Asia Pacific Hospice Conference、APHC, 2011）が2011年7月14日～17日、マレーシアのペナン（Penang）で開催され、参加した。ペナンはマレーシアの西側に位置する島にある観光の名所であり、美しい町である。ぎっしりと詰まったスケジュールで観光する時間は全くなかったが、ホテルから空港へのタクシーの窓からは美しい緑と海が広がっていた。

大会には28カ国から約700名が参加した。今回はAPHCの母体であるAPHN（Asia Pacific Hospice Palliative Care Network）が正式にスタートしてから10年目にあたる記念の大会であった。APHNは1995年に日野原重明先生がアジア、太平洋地域の6カ国のホスピス関係者を日本に招いたことがきっかけで組織された。

私がAPHNの副理事長を務めているという関係もあり、日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団は設立当初からAPHNの働きを支援してきた。今回のAPHCは10回目という記念大会であり、創設者である日野原重明先生をお招きしたいというDevaraj会長の強い希望があったが、日野原先生の予定と合わなかった。しかし先生はビデオで挨拶をされ、とても好評であった。

大会そのものは学術的にもかなりレベルの高い発表が多く、学ぶことが多数あった。日本からは当財団理事の恒藤　暁先生が招聘講演として「医学部における緩和ケア教育」について、話された。

私はシンガポールのGoh先生とオーストラリアのShaw先生による「緩

WPC ワークショップに参加して

（前ページより続く）

北海道医療大学　看護福祉部　川村三希子

この度、Whole Person Care ワークショップに参加する機会を頂きました事に心より感謝申し上げます。

今回の研修は、Self-Awareness、Self-Knowledge のワークがあるということでしたので、正直少々身構えて研修に参加いたしましたが、Michael Kearney先生ご夫妻の温かいお人柄に包まれ、“今ここで”の自分の気持ちや身体に目を向け、瞑想の体験を通して自身についてゆったりと考えることができました。今回この研修で初めてお会いする他職種の方達も多かったのですが、自分が選んだカードを使っての自己紹介など、参加者皆様のお人柄の一端に触れる機会もあり、温かい空気の中に自分を置くことができる環境で2日間を過ごさせていただきました。

2日間の中で、たくさんのメッセージやキーワードを頂きましたが、その中でも心に留まっていることは、「Exquisite Empathy（真の共感）」とはどういうことなのか、ということです。巻きこまれまいと患者と距離を置いてしまったこと、自分と患者との境界がわからなくなり、患者のことを自分の問題かのように引き受けてしまったこと、そんな自分の若き頃の臨床経験と対峙させながら、Highly Present, Sensitively Attitude, Well-Boundaried, Heartfelt の一つひとつの意味を考えておりました。そして、これらの観念的な概念をどのように実践的に教育するのか、それは今後も検討し続ける必要があることだと思いますが、援助者としての専門職である限り、Self-Awareness、Self-Knowledgeし続けることが基盤であることを再認識しました。多職種の皆様と貴重な時間と体験を共有できたことを嬉しく思っております。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、会をコーディネートしてくださった恒藤先生はじめ財団の皆様、そして通訳の児玉智子様に心より感謝申し上げます。

静岡県立静岡がんセンター　福地 智巴

常々、HealingはSelf-healingが基本であると理解していたが、今回のワークショップでそのことを再確認できた。そしてSelf-healingを賦活できる存在となるためには、患者・家族に向き合う側が、癒される存在としての自己を認識し、Self-healingを実践することの重要性の認識も強化できた。

Michael Kearney先生ご夫妻の講義や瞑想は、自己内のWhole（全体性、統合）を獲得することが、適切かつ安全な環境=ケアの器になるための第一歩であり、ケアの器としてのBeingが可能になれば、関係性の中で、個々のSelf-healingの力が賦活されることを教えて下さった。

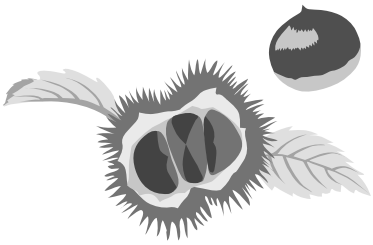
ソーシャルワーカーは、自分の価値が何であるかを知り、その価値が臨床にどのように影響するかを学ぶ『自己覚知』の研修を受けることに慣れている。しかし、そうした自己覚知の研修で自覚した自己を癒しの対象と捉え、Self-healingを実践することへの意識には個人差があると思われる。それはBeingを許される存在になろうとするあまり、Self-judgmentの意識が強くなるからかもしれない。今後は、自己覚知の研修の中に、実践的なSelf-healingの方法を組み込んでいくことを提案していきたい。

最後に、今回のワークショップの初めと終わりに行われたポストカード（写真・絵画・言葉など）を使ったワーク（瞑想した後、自分にとっての『癒し』を思いながら、カードを選び、そのカードを一言で表現する）では、参加者それぞれの癒しのイメージを知ることができた。職種としての認識の違いを体験する研修ではなく、多職種で互いの内面の一部を知ることができたことも貴重な体験であった。

和ケアにおける物語」というセッションの座長を務めたが、両先生の豊富な臨床経験から教えられるところが多かった。

私は現在、APHNの副理事長であるという関係もあり、大会にはずっと参加してきているが、ここ10年ばかりの間にアジア環太平洋地域におけるホスピス緩和ケアはすばらしい発展を遂げたと感じている。ホスピスや緩和ケアベッドの数が増えたというだけではなく、そのケアの中味の向上には目を見張るものがある。例えば今回の大会開催場所であるマレーシアを例にとれば、10年前には細々と在宅ホスピスケアをしていただけであったが、今日では大会を主催できるだけの実力をつけてきている。

日本のホスピス緩和ケアもここ10年で随分発展したが、もっと国際的な交流に力を入れ、諸外国から学ぶ必要があると強く感じた大会であった。



2011年度 ホスピス・緩和ケアボランティア研修会

＊＊＊ 「いのち」へのまなざし ＊＊＊

今回で第10回を迎えた、ホスピス・緩和ケアボランティア研修会が、５月21日（土）クレオ北大阪で開催されました。基調講演では、関西学院大学人間福祉学部教授の藤井美和先生より「いのち」へのまなざしと題してご講演いただきました。ご専門の死生学とご自身の病の体験からの講演は、深く聞くものの心に響くものがありました。東北の大震災後、多くのボランティア活動が進められていますが、基調講演および３名のパネリストによるシンポジウムを通して、本来のボランティア精神を再確認できた研修会となりました。

参加　193名

研修会 参加報告

日本病院ボランティア協会理事
永井　律子

今回のテーマ「いのち」へのまなざし、まず基調講演で藤井先生による、死生学とはいのちをどのように捉るか、生と死は同じであり生きることを考えるということである。人間本来の根源的な痛み苦しみは人であるから起こりうるものである。そして関わりの本質は寄り添いであり、究極は共に支え合う人間関係である。とのお話しがあり、ご自身の難病という体験を踏まえての心に深く染みる内容であった。

後半では3人のシンポジストによるそれぞれの立場における、人と人との関係の大切さ、縁という不思議な繋がりのなかで傍らにいる、自然体でさりげなく心を掛けて寄り添う、という各々の話が「まなざし」という言葉に吸い寄せられているように感じた。寄り添い関わること、個々の立場を尊重し、そっと見つめることなどを想うと、「いのち」へのまなざしとは単に見つめるというものではなく、奥深く慈しみの心で接していくもの、押し付けない控えめな態度で対応していくことなのか、とあらためて考えさせられた研修会でした。

こんにちは ホスピス

（ヴォーリズ記念病院ホスピス開設5周年記念会）

こころに寄り添うホスピスケア

ヴォーリズ記念病院ホスピス長　細井　順

ヴォーリズ記念病院ホスピス開設5周年記念ターミナルケア講演会が9月23日に快晴に恵まれた滋賀県近江八幡市で開催された。550名の参加者（一般の方65%、医療関係者35%）が会場を訪れた。第一部では、「こころを結ぶ音楽の贈りもの」と題したバイオリニスト梅原ひまりさんによるコンサートがあり、第二部で財団理事長柏木哲夫先生にご講演頂いた。「こころに寄り添うホスピスケア」と題した講演で、先生はホスピスケアの原点、神髄を「こころに寄り添う」という表現で示された。また、寄り添うために人間力が求められると語り、人間力の具体的なことについて7つの項目を示された。柏木先生のご講演はユーモアに富んだ語り口を通して心を和ませ、難解なテーマであってもポイントを平易に伝えていただける。それだけ、先生は聴衆に目配り、心遣いが行き届いているわけである。そんな先生には人間力にプラスアルファして人間味という言葉を贈りたいと思った。この人間味こそ、ホスピスで最も大切なケアのこころではないだろうか。そばに寄り添う人に必要なことは人間味のある暖かさである。かつて柏木先生が淀川キリスト教病院ホスピスで見せて下さった回診の光景が脳裏に甦ってきた。

用意した先生の近著（「死にざま」こそ人生、50代からはじめるユーモア）も完売した。参加者からのアンケートは、医療者ならずとも日常の生活に役立つ講演だったと参加できたことへの喜び、感謝の声に溢れていた。

これからも先生、財団の仕事を少しでもお支えすることができたらと感じる講演会であった。

改めて、講演会を支援して下さった方々に御礼を申し上げます。

近刊紹介

「死にざま」こそ人生

「ありがとう」と言って逝くための10のヒント

柏木哲夫著（朝日新書）

人は、生きてきた「生きざま」が「死にざま」に凝縮される。そして「死にざま」の凝縮が「最期のことば」なのである。最後に家族に「ありがとう」と言え、家族から「ありがとう」と言ってもらえて最期を迎えられれば、それは「よき死」と言えるであろう。‥‥本著「はじめに」より。

多くの人を見送った著者の経験から語られる言葉は、必ずいつかは死を迎える私たち一人ひとりに、もう一度自分自身を見つめ直す、良き機会を与えるものと思われる。終章の山崎章郎氏との終末医療対談も加えられ、臨床での実践においても多くの示唆が与えられる好著。

寄付・賛助会員のお願い

私どもの財団は2000年12月設立以来、厚生労働省所管の財団として、ホスピス・緩和ケアの普及・向上を目指して一筋に歩んで参りました。今般、改めて公益財団法人として認定されたのを機に一層、気を引きしめて所期の目標に向かってすすんで行く所存です。

私たちの活動は、全て、皆さまからのご寄付と賛助会員の方々の会費に拠っております。どうか私どもの活動の趣旨をご理解いただき、ご寄付・賛助会員のお申し込みを頂けるようお願いします。

また、上記の随時・一般的ご寄附とは別に「遺贈」に拠る寄附もぜひご一考下さい。当財団は、中央三井信託銀行と「**遺贈による寄付制度**」について提携しております。公益法人への遺贈に拠る寄付財産は、原則として**相続税の非課税財産**となります。

上記ご寄附、賛助会員、遺贈に関するお問い合わせは **06-6375-7255** です。

(公財)日本ホスピス･緩和ケア研究振興財団

2011年度　事業進捗状況報告

— 2011年4月～2012年3月 —

1. ホスピス･緩和ケアに関する調査研究事業（4件）　進行中
2. 遺族によるホスピス･緩和ケアの質の評価に関する調査研究事業【JHOPE-Ⅱ】　進行中
3. 『ホスピス･緩和ケア白書 2012』作成･刊行事業　進行中
4. ホスピス･緩和ケアに関する意識調査（第3回）事業　進行中
5. 「Whole Person Care ワークショップ」開催事業
   実施：10月1日―2日（土～日）於：千里ライフサイエンスセンタービル　参加者：32名
6. 緩和ケア従事者のグリーフケアと気付きのワークショップ開催事業
   予定日：2月11日（土）　於：千里ライフサイエンスセンタービル
7. ホスピス･緩和ケアボランティア研修セミナー実施事業
   実施：5月21日（土）　於：クレオ北大阪　参加者：193名
8. MSWスキルアップ研修セミナー開催事業
   予定日：12月10日―11日（土～日）　於：静岡教育会館
9. グリーフケア研修セミナー開催事業
   予定日：1月7日（土）　於：龍谷大学
10. Liverpool Care Pathway（日本語版）研修セミナー開催事業
    第一回　7月 9日（土）　於：広島県緩和ケア病棟連絡協議会
    第二回　7月29日（金）　於：日本緩和医療学会学術大会（札幌）
    第三回　9月 4日（日）　於：日本ホスピス緩和ケア協会四国支部会（観音寺市）
    第四回　10月9日（日）　於：日本死の臨床研究会（千葉）
    第五回　11月20日（日）予定　於：日本死の臨床研究会近畿支部（大阪）
    第六回　2月26日（日）予定　於：群馬緩和医療研究会春季大会（館林市）
11. 小児科医のための緩和ケア研修会
    予定日　1月14日～15日（土～日）　於：日本財団ビル（東京）
12. ホスピス･緩和ケアフォーラム開催事業
    予定日　1月8日（日）　沖縄都ホテル
13. 財団設立10周年記念講演会開催事業
    11月9日（水）　新阪急ホテル

寄付者一覧

（2011年4月～2011年9月　順不同、敬称略）

（個人）　中村　廣子　　原田　寛子
James Whitlow Delano
谷　浩男　　板垣　孝子
匿名1名

（団体）　公益財団法人 日本対がん協会

新規賛助会員

（2011年4月～2011年9月　順不同、敬称略）

（個人）　徳永　美智子　　林　ゑり子
桂　太一　　秋岡　卓夫
堀内　妙子　　板垣　孝子
松原　正利　　室崎　伸二
匿名6名

（団体）　燦ホールディングス株式会社
株式会社 中日本造園土木
大成サービス株式会社 名古屋支店

編集後記

秋の深まりを感じる今日この頃ですが、一方で地震、台風と多難な年、心穏やかではおられない毎日です。

同時に命の大切さを思い、また「生と死」を見つめ直すことを、一人ひとりに迫られているように感じます。

皆様のご支援で、当財団もこのたび、設立10周年記念講演会を行うことが出来ました。引き続き財団の使命である「限られた命を尊重し、充実した生を全うできるための全人的ケア」の推進に、なお一層貢献したく願っております。